

生きてゆく

川口松太郎

川口松太郎

筆下

講談社

生きてゆく

昭和五十年五月二十四日 第一刷発行

著 者 川口松太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号一二二

電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© Matsutarō Kawaguchi 1975. Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

長篇小説

生きてゆく

装帧
枅折久美子

第一章

雉^き子が一羽板の間へ投げ出された。雌の雉子で、羽毛は美しくないが肉は肥えていそうだ。土地の獵師が射ち落して持って来る。

「雌は珍しいな」

羽根の表面にさわりながらいった。

「本当はいけねえんですよ。雌を射っちゃなんねえといわれてるんですが、味がいいからね、滅多に射たねえが、雄雌同時に飛び立つので見当が狂って雌を射ちやんした」

小声のつもりでも獵師の声は高い。いわれるままの金を払って、改めて雉子を手に取った。肉は買えないし、魚も生ものがなかなか手に入らず、食料は不自由を極めて米の配給も豆が四分入る。そんな中で、雉子の肉は何よりの栄養素だ。朝子^{あさこ}も目を輝やかしたし、孝^{たかし}は早くも毛を筆ろ

うとする。朝子があわてて止めて、

「今はまだ駄目よ、首だけ切って」

いいながら俎板に出刃庖丁を揃えてストーブのそばへ置いた。朝子が出刃を手に取りとうとしたが、

「いけないよそんな大きなお腹をして」

朝子は苦笑してやめた。彼は出刃で雉子の首を落とす足を持って逆さにして台所の土間へ吊り下げた。麻紐で両足を縛って土間の棚の釘に吊す。二時間もすると血がすっかり落ちて料理しやすくなる。血を抜かずに食べると肉に臭みが出るのだ。雉子の血は紅色で美しいが一夜そのままにして置くと黒ずんで土間にしみついてしまう。春になると生餌につくから臭くて食えないが、雪の中の雉子は実にうまい。台所へ吊したあと、ストーブを囲んでやっと手に入れたウイスキーを湯で割って飲む。朝子も飲みたそうな顔をし、少し飲めとすすめると、

「よすわ、酒飲みの子が出来ると困るから」

「ババ、雪が降って来たよ」

孝が窓を細目に開けた。日が暮れかけて細かい雪が静かに降り出している。

「ひき子大丈夫かしら」

「大丈夫だよ、ババのレインコート着て行ったもの」

大人のようないい方だ。まだやっと七つなのに知恵の廻り方が早い。ロシヤストーブは木でも石炭でも何でも燃せるが、石炭は手に入り難く、庭の落葉松の下枝を打ち落したり、隣近所の庭へ入り込んで枯れた下枝を打ち落したりして燃す。落す時は孝も一緒だ。麻紐の端に錘をつけそ

れを枯れ枝にからませて強く引くと、ピシッ——冴えた音が飴こたまして冷え切った空気を裂くように流れる。いい気持の音だ。あたり近所残らず不在で雪の中に住んでいるのは土着の人間と我が家だけ。夏は樹木が繁って隣家との間の木立が垣根になるが、冬は木々の葉が落ち尽して隣家との隔てがなくなり、遠くまで見渡せて二丁ほど先の草津電車の通るのまでが見えて来る。何処の庭へ入って下枝を打ち落しても叱られる氣づかいはなく、孝と二人がかりで集めた枯れ枝は、燃しいいように小さく折って当分の燃料にする。枯れ切った枝はよく燃えるが生木が交じっていると何時までも煙っている。古風なロシヤストーブが一家の安息所で、家中みんながストーブを囲んでの生活。

ひさ子が帰って来た。彼のレインコートを頭からかぶって、手にした買物袋には買い集めた食料がぎっしり入っている。

「ひどい雪になったわ」

コートを脱いで吊すと障子を閉めてストーブに寄った。孝は叔母の両手を小さい手で包む。赤くかじかんだひさ子の手が寒そうだ。

「いい子だね孝ちゃん、直ぐそうやって暖めてくれたりして」

喜んだひさ子は孝のおでこにキスをしてやる。

夜はひさ子の買って来た豆腐と生鰯で鰯ちりをする。ストーブに鍋をかけると沸きすぎるので、七輪に火を少しおこしてそれに土鍋をかけるが、寒いので夜はどうしても鍋ものになる。朝子は鰯ちりが好きで「日本酒を少し」と彼の顔を見ながらいった。少しの酒なら子供に影響もあるまい。鰯を洗うのも豆腐を切るのも薬味の葱を細かくきざむのもひさ子の役目、よくやってく

れる。飯だけは朝子が炊いている。外は雪だし、ちり鍋を囲んで四人の家族が乏しくとも楽しんで夜飯を喰う。雪はますます降りしきって明日は又積もるだろう。

罎ちりで一合の酒を楽しんでいると、仕合せらしい空気が流れる。僅かな酒でも直ぐ酔うようになった。

「孝は明日学校が辛いだろう」

学校までは遠く、大人が歩いて三十分はかかるのに、ましてこの雪だ。

「明日は休んだ方がいいわ」

とひさ子という。朝子も同意するような顔色だが、

「大丈夫だよゴム靴があるんだもの、平っちゃらだい」

むしろ楽しいといわんばかりに肩を上げた。行くか行かないか暫くごたごたがあつて、

「万事は明日の朝だ」

と彼が決断した。食事がすむとストーブに沸いている鍋の湯を台所へ持って行ってあと始末をする。水道は不凍で真冬でも凍らない代りに、夜でもちよろ水を出して置く。沸かしたお湯を水でぬるめてひさ子が洗いのをし、孝が布巾で拭く。二人とも本当によく働く。夫婦は陶然としてストーブのそばの安楽椅子にうとうとする。窓は雨戸も硝子戸も目張りをしてあるから、風も入らず外の音も聞えない。

寝るのはみんな二階だ。掘り炬燵のある十畳の部屋へ布団を十文字に並べて足は炬燵に向けて寝る。掛け布団が炬燵の上から流れていて炬燵の中は暖かすぎる。体の冷えているうちはいいが、暖まって来ると足を外へ突き出したりして熱がる。勿論ストーブの残火は十能へ取って台所

の外の雪の上へ投げ出して置く。下の電灯をみんな消して二階へ上ると、あとは小型のラジオでニュースだの戦況なぞを聞く。勝った勝ったの大本営発表もだんだん力がなくなってきた。そのあとが軍歌音楽、聞くまでもなくスイッチを切れば孝は軽い躰を立て、ひさ子もどうやら寝たようだ。手を伸ばして朝子のお腹の上をさすって見た。

「今頃は毎日動くの、夜中に目をさます事もあるわ」
「産れるのは何時だと思う」

「今月うちか、来月の初めか、どっちにしても間もなく産れるわよ。産れる時はこっちにいて欲しい」

「日取りがはっきり判っていれば来られる。なるたけ俺の帰っている時に産めよ」

「そううまくいけばいいけれども、こればかりはね」

「医者はどうするんだ」

「お産婆さんがいるからいいでしょう」

夫婦はこっそりしゃべった。ひさ子や孝の眠りを妨げないように、もうはち切れそうなお腹だ。仕事があるので此処にも長くいられない。朝子は心細げだが、

「働かなければ困るよ、今の場合は。産れれば産れたで費用がかさむからな」

「そうね、あなた一人に頼っていてすみません」

「そんな意味でいってるんじゃない。此処にも長くいられないという事だよ」

「それは判ってるんだけど、ひさ子と孝だけじゃ心細いから」

二人だけになるとふだんの心細さをいい出すが、彼には答えようがない。あたりの静けさを破

るように雉子の啼く声がケーンと鋭く聞え、眠りかけている二人とも目をあけた。雉子は必ず夜半に啼く。敵の襲撃を受けた時に声を上げて飛び立って敵を驚かすのだという。それも一声だけで又静かになる。朝子はうとうと眠った。お腹に置いた手を引っ込めようとする、

「そのまま放さないで」

とうつつ声だ。お腹に手を置かれていると安心出来るのか、男が自分のものだとはっきり思えるのか。

翌る朝は雪がやんで空が青くいい天気だ。一番先に起きて階下の窓を開けると、雪に反射する陽の光が痛いほど眩しい。何よりも先ずストーブを燃した。冬の枯れ枝は簡単に燃えつき、鍋に水を一杯入れてかける。朝はパン食なので仕度は簡単だ。パン焼きの網をストーブの上に乗せてパンを焼く。

「すみません」

とひさ子が起きて来た。孝は早くも長ゴムを穿いて雪の上へ降りた。一尺近く積っている。ひさ子がフライパンをストーブの上で暖めて玉子を四つ焼く。ハムは鯨なので此頃は玉子だけにしている。一人一個ずつであとは紅茶。孝の学校から電話で「雪が深いから休校にする」と知らせて来た。学校といっても暁星の疎開学校で、孝は慶応の幼稚舎生だが、戦争中それぞれに疎開して土地の小学校に入る事を許している。暁星の先生に頼むと直ぐに入れてくれた。ゴルフ倶楽部の近くのホテルを借りてそこを教室にしている。夏のホテルで冬は営業してないから疎開学校には好都合だが、通う道が大変だ。雪がひどく降ったり積もったりすると休校になる。

「こない天気のなに休む事はないがなア」

孝は不服そうだ。疎開学校で友達も少ないのに喜んで出て行く。気性が明るいので誰にも好かれていたようだ。

「孝、雪掻きをしよう」

「うんやろう」

そういう事の好きな孝は又直ぐゴム長を穿く。彼も同じようなゴム長で雪掻きを手にして林の間の道だけの雪を掻いた。積もってはいとも新雪がふんわりしていて割に軽い。林の間を道が曲りくねっていて、門までの距離は相当ある。ひき子も出て来て手伝ったがなかなかの労働だ。寒いのに汗がばたばた落ちて来る。やっと門までの歩く道を拵え、門の外も一筋だけ歩道を作った。その間に担ぎ屋が物を売りに来る。少しばかりの野菜と玉子とひからびた干物で買うような物がない。

「米を持って来いよ。いくらでも買ってやるから」

「米はやかましいんでね、見つければ取られちまうし、高い闇値で買って来て巡査に取られちゃ合わねえから」

「だからそうと持って来るんだ、いくら持って来ても買ってやるから」

狡ずるそうな婆さんはぶつぶついいながら帰って行く。玉子だけ六個買ってやった。町の店よりも少し高い。

その間に朝子は雉子の羽根を筆ひった。一晚吊して置くと肉が凍りついて、白い羽根が少しの力でつると綺麗に剥むける。内臓だけは掻き出して、あとは骨もろともぶつ切りにする。肝は別に

切つて笹に入れ、一寸五分角の切り身にした肉はそのまま板の間へ転がして置く。自然に凍つて冬中はちつとも腐らない。

「いけないよお前がそんな事をしては、胎教に悪いじゃないか、残酷な事は一切やめなければいけない」

彼は叱つたが、自分でなければ出来ないからと笹の中の肝を示し、

「ご覧なさいパパ、食道から胃袋まで赤い木の実が一杯、まだ消化されずに残っているわ」
胃袋の中の木の実我真つ赤な色をしている。

「人間はいけないね、雉子は木の実を沢山含んで今年産れた小さい雉子の餌にするのだ。それを横取りして、親鳥の帰りを待っている雛鳥は一晚中啼いているだろう」

と彼はいった。全く人間は悪い。赤い木の実を胃袋に一杯つめているのを見ると悲しくなるが、今はそんな事もいってられない。

雪掻きを終るとストーブの上で芋を焼いた。秋のうちにしこたま買い込んで室へ入れて保存してある。川越まで買いに行つて俵に一俵分買つて来た。ひさ子も孝も喜んで食べるが、朝子はそれほど喜ばない。お腹が大きくなると食べものが違つて来るようだ。

「お芋をよく食べるからオナラが出て仕様がな」

「僕もだよ叔母ちゃん、教室で大きなのが一発出てしまつてみんなに笑われた事があるんだ。でも僕は先生にそういったよ、代用食にお芋を食べるからどうしても出るんですって。先生もケラケラ笑つた」

ひさ子も朝子も吹き出したが、彼は笑わなかった。代用食の芋で屁が出るのは哀れすぎる。

「米はあるんだぜ、みんなが好きで芋を喰うんじゃないか」

「そうよそうよ、好きで食べてるのよ」

「米も喰えよ、いくらでも買って来るから」

町を離れた丘を一つ越すと米を作る百姓の村がある。そこまで行けば古米を売ってくれる。新米は自分たちが食べて買い出しに来る連中には古い米を売る。値段は無論闇値だ。

あんまり天気がいいので午後は孝を連れて浅間山の見える空地へ行った。町を少し離れると火山岩の多い広い空地が至る所にある。そこからは浅間がよく見える。道を踏み固めたところは自転車で行き、空地にかかると自転車を押して山の見える所まで歩く。空は真っ青に晴れていて白樺林の上に浅間山がくっきり見える。雪をかぶった山の姿は美しく、白い噴煙は形ばかりに細々と煙をなびかせている。小浅間も前立山も真っ白く陽に光って空には一ひらの雲もない。

「素晴らしいな、こんな美しい山は初めて見た」

「パパは登った事ある？」

「うん、登りかけたことがあるんだ。ママも一緒だったが、峠の茶屋を出たところでドカーンと一発、大きな音と一緒に地響きが起って、お山は凄く噴煙を噴き上げ出した。驚いて峠の茶屋へ引返したが、茶屋まで来るとばらばら小石を混じえた火山灰が降り出した。あの時は凄かったぞ」

「雪の降っている時は爆発しないのかい」

「いやそんな事はない、雪が降ったって噴き出す事がないとはいえないよ」

「今日はどうかろう、噴き出さないかな」

二人の目は浅間山へ焼きついたが、雪山が青い空に輝いているだけで静かにどっしりと身動き

もせず雪の中に坐っている。孝は少年らしい好奇心で山の噴火に期待しているが、浅間はびっくりとも動かない。だんだん寒くなった。雪の中に立っていると足許から這い上る冷たさが下半身を麻痺させる。

「おい歩こう、車の使える所は車に乗れ、足が堪らないや」

自転車を押して雪の道を万平道路へ出ると、そこから先は道が凍っている。親子は自転車に乗って体の暖まるように、直ぐは家へ帰らず、葉を落した林間を町まで行った。何処の店も戸を閉めている。此の町に定住しているのは藤田牛肉店としむら薬局と子供の玩具を売る小島、雜貨屋のつちや等でそれも殆んど店を閉めてひっそりしている。町通りはゆるい坂道になって碓氷峠の上り口を兼ねている。しむらの薬屋だけが硝子戸の一部を開くようにしており、立ち寄って薬を二、三種買う。

「奥さんはまだかね」

しむらの親父は親しげな口をきく。朝子の妊娠を知っているのだ。町に定住する商人は友達も同じでどの店も古い馴染だ。しむらばかりではなく町の古い商人はみんな友達になっている。朝子の拵えてくれたズックの鞆へいろいろ買物をつめ込み尚も自転車で上へ行く。家の絶えるあたりは雪が深いのでそこから引き返してつる屋旅館の前まで来ると、二階から呼びとめる人がいた。東京からの疎開者で日本橋の芸者が母親と一緒に来ているのだ。

「先日は奥さんに頂き物を致しましてありがとうございます。大変美味しくって母も大喜びです、本当に御親切にありがとうございます」

とくり返し礼をいう。食料に不自由するということで朝子が何かやったようだ。色の真白い美し

い人だが足が悪い。関節の病気で思うように歩けぬらしい。年はまだ三十そこそこののに、悪い時節に不幸な病氣にかかって母親ともども知らぬ土地で苦勞している。

「寒いでしょうこの土地は、寒いと悪いんじゃありませんか」

「はい、よくございません」

「炬燵ありますか」

「はい、それで凌いで居ります」

「何か又不自由があったら電話下さい、私たちは長年此処にいますから知り合いの店も多いので米以外のものは何とかあります」

「はい、どうぞお願いいたします」

「ではお大切に」

「ずっと此方ですか」

「いえ僕はそうも行きませんが家族はみんないます」

「奥さんどうぞお大切に」

「ありがとうございます」

そこで自転車へ乗った。孝はずっと先へ行つて待っている。追いつくと、

「あれはだアレ？」

「パパの知り合いだ。足が悪いのに疎開して来て気の毒なんだよ」

いいながら坂道を下った。人影がないから不遠慮に走れる。郵便局の角を曲ると、八百屋のさわ屋はあるが、品物は殆んどない。店中を物色するとうどんの玉があった。凍ってカチカチにな

っているのは自然の造る保存食だ。あるったけみんな買った。

「店へ出して置いてえらい事をした」

と老主人は渋い顔をしている。ズックの鞆には入り切れず、うしろの籠にも入れた。隣は本屋の三好だが此処も売り物は何にもない、あれば戦争ものばかり、テニスコートにも人影はな一面に雪が積っている。小林酒店へ寄ったががらんとしていて、

「焼酎が少しあります」

と老主人がいう。そんな強い酒は飲めない。

「日本酒が入ったら知らせてくれ」

「入っても高いよ、どうせ闇だから」

「高いのは驚かないが銘柄不明はいやだぜ、アルコールなんぞ吞まされたら堪らない」

「そんな事はしないよ、うちは銘柄のはっきりしないものは扱わないから」

と老主人はやつと腰を上げて、

「ウイスキーが一本入ったんだが、サントリーの丸瓶で十円なんだ」

「そいつは高い、十円は高すぎる」

「だからすすめないんだよ、これだって××大臣行の横流しだ、全く高すぎるが品物がないから仕方がない」

まるで高飛車だ。無理に売ろうとはしない、品物を握っている強さでどんと構えている。欲しいが我慢した。十円あれば相当の闇米が買える。米が無ければ一家は飢えるがウイスキーはなくても困らない。そんな計算が自然に出て来る。世智辛い世相だ。